２つの『コト』が生むまちづくり

荻窪、西荻窪、高円寺、阿佐ヶ谷・・・
杉並区のどのまちも共通して個性的な個人商店の集積が、
まちの表情を豊かにしている。

歴史を遡ると、戦後間もなく個人商店の集積が始まった荻窪は、
水の波紋の様に連鎖して広がった結果、賑わいを生んできた。

小さな出来事の集積によって賑わいを生むことが、
荻窪らしいまちづくりを持続させると考える。

小さな『事（出来事）』を創る操作の繰り返しが、
『言（言葉、コミュニティ、賑わい）』の連続を生みだすような、
２つの『コト』による荻窪のまちづくりを提案する。

この提案によって、時代が変化しても、
杉並らしさ、荻窪らしさが持続するまちを目指す。

荻窪らしいまちへの３つの手がかり

荻窪の成り立ち

「小さな『事』から始まった荻窪」

1891　甲武鉄道開通

1946　荻窪振興商店街開業

敗戦翌年、限られた生活物資にも関わらず、荻窪は市場として賑わった。荻窪の戦後復興は、人々の力に支えられた「荻窪振興商店街」からスタートした。

1949　天沼陸橋完成

天沼陸橋が完成し、青梅街道が中央線をまたいだことで、中央線の高架化が困難になった。その結果、荻窪駅の南北は分断された。

1981　タウンセブン開業

時代の変化とともに、戦後から活気ある荻窪を支えた新興商店街は、「タウンセブン」として、新しく生まれ変わった。

2012　（仮称）荻窪駅周辺まちづくり会議発足

再び荻窪の活気を取り戻すため、地元住民の力を合わせてまちづくりを話し合う会議（仮称）荻窪駅周辺まちづくり会議」がスタートした。

※写真:松葉　襄 氏(荻窪百点編集長)
タウンセブンオフィシャルHP

2031　タウンセブン 50 周年

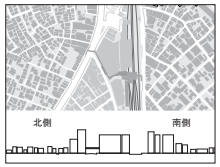
2032　更なる少子高齢化社会へ

「タウンセブンの可能性」

タウンセブンは、荻窪らしいまちづくりをスタートさせる可能性を秘めている。
1981 年、タウンセブン（・ルミネ）は、荻窪振興商店街の一角を再開発して誕生した。
タウンセブンの誕生により、防災上の危険性、来客数の減少など、かつての荻窪駅北口周辺が抱えていた問題が解決された。現在でもペデストリアンデッキと一体化した建築として都市に寄り添い、地元住民の馴染みの場所として、荻窪のアイデンティティを受け継いでいる。
2031 年、タウンセブンは開業 50 年となり、建替え更新時期を迎える。
現在の荻窪が抱える南北分断等の諸問題の解決を、再び、荻窪のアイデンティティであるタウンセブンを中心に図ることは、荻窪らしい、馴染み深いまちづくりを可能にさせる。

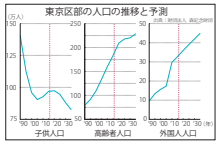
「２つの“まち”の存在」

1949 年、天沼陸橋が完成したことで、中央線、青梅街道を境に南北のまちが完全に分断された。その結果、荻窪駅の南北に２つのまちが存在している。
この２つのまちは、一方は面的に、一方は線的に、それぞれ異なる特徴を持つ。



「少子高齢化、外国人増加」

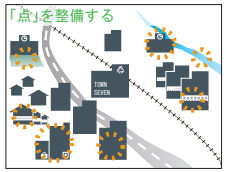
20 年後、日本は少子高齢化社会を迎える。加えて外国人の増加が予想される。杉並区も日本社会が抱える課題を共有しながら、全域に広がる住居地域のための住み良いまちづくりを目指すことになるであろう。
ここ荻窪でも駅を中心に広がる住居地域に住む住民（子供、高齢者、外国人）にとって住み良い環境を得られる、新しい取り組みが必要不可欠である。

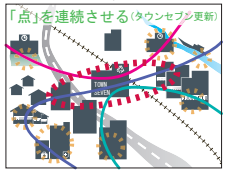


荻窪らしいまちへの３つのカギ

「２つの『コト』によるまちづくり」

荻窪が現在抱えている、南北の分断を今すぐに解決するのでなく、タウンセブンが更新時期を迎えるまでの20年は、２つの『コト』によるまちづくりを展開する。
具体的な手順は、
①人間関係の構築や、まちづくりの仕組みを整え、
②『点（既存の空間・場所）』を整備して、そこに『事』を加える。既存の空間に新しい『事』が加わることで、新しい『言』が生まれ、２つの『コト』のある荻窪らしさのあるまちとなる。





「荻窪にしかない『コト』」

南北の２つのまちには、それぞれ小学校や商店街などが位置し、特徴の違うまちを、さらに個性的にしている。
そのような特徴ある既存の空間を「点」として、『事』を加える。
それにより、荻窪にしかない『コト』が生まれる。

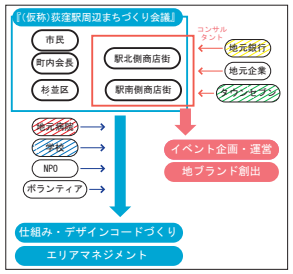
「ストーリーのあるまち」

物理的な南北分断の課題は、20 年間で構築された主体間の連携でタウンセブンの周辺を巻き込んだ更新で、南北を横断する連絡通路を実現し、その解決を図る。
連絡通路により整備された「点」が、線として連続し南北をまたがるストーリーを描き出す。『コト』の連続は、荻窪らしいまちをつくり、居住者の生活を彩り、来街者にとって表情豊かなまちを演出する。

Phase1

仕組みを整える

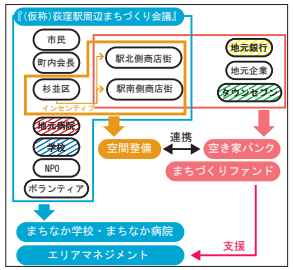
荻窪駅周辺まちづくり会議を中心に、住民参加で「まちづくりの土台」づくりを行う。同時に、学生やボランティアを巻き込んだエリアマネジメントにより、会議の結果を目に見える形で実際のまちに還元する。
また、南北商店街を中心に、まちの賑わい創出に繋がるプロジェクトを展開し、荻窪のアピールを行う。



Phase2

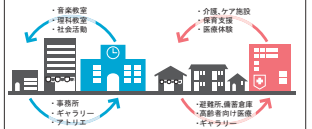
「点」を整備する

住民主導で定められた仕組みやデザインコードを基に、空間整備を行う。空間整備の対象は、公園や善通寺川、空き家や各商店街の空き店舗である。
整備された空間は、市民活動の場であると同時に、小学校、病院、行政施設の機能の一部をまちなかに設置する場となる。またソフトの支援も行われる。



まちなか学校・まちなか病院

それぞれの施設の一部機能をまちの中に点在させることで、教育や介護を身近に感じる『事』を創出し、大人も子供も隔てない『言』を生み出す。



まちなか学校
まちなか学校は、地域文化の継承など世代間の交流を生む。学校の余剰床も有効に使う。

まちなか病院
身近な場所での介護や保育は、地域住民への親しみを生む。病院の余剰床は、医療環境向上などに利用する。

空間整備

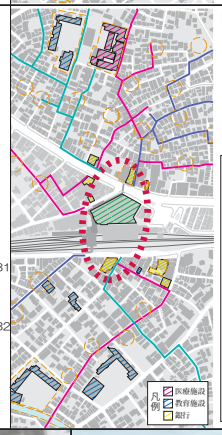
すでにあるまちを使う
すでにあるまちを使って、荻窪にしかない『コト』を創出する。既存の空間に新しい『事』を加え、利便性向上や『言』の創出を図る。

銀行×カフェ
銀行の待合い室は、夜間使われない。カフェと空間を共有することで、夜でも賑わいが生まれる。

商店街×行政機能
市民の目に留まる、開かれた行政を実現させ、行政サービスの利便性を向上させる。

善福路川×親水空間
親水性のある善福路川は、まちに季節感を与え、人々の憩い・交流の場として機能する。

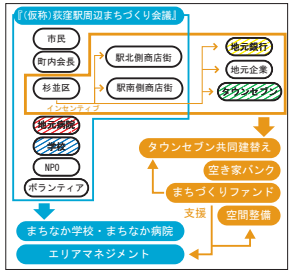
商店街×保育室
子持ちママが安心して買い物ができる環境とママさんコミュニティを創出する。



Phase3

「点」を連続させる（タウンセブン更新）

荻窪駅周辺まちづくり会議を中心に繋がった“付き合いのある”地域の主体が、協働でタウンセブンを更新し、南北の連絡通路を実現する。
２つのまちで培われた『コト』は連続し、南北をまたいだネットワークとして、回遊性のあるまちとなる。



『コト』の連続

タウンセブンは、南北の連絡通路としての役割を持つ。これにより、フェーズ２までにそれぞれの「点」で培われた小さな『コト』は、連続し南北をまたいで「線」として南北をまたぐ回遊性を創出する。

タウンセブンの建替え

地域の多主体が協力して建替えすることで、これまでなかった機能をタウンセブンに巻き込み、小さな『コト』を集積させる。

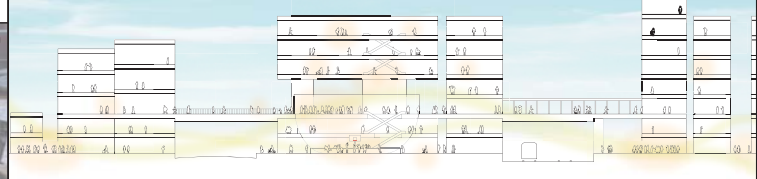
小学校体育館の設置
平素は市民も使用できる運動施設として、有事は利用者数の多い荻窪駅の駅前滞留者の避難場所として機能させる。

東京衛生食堂の設置
多主体が関係するまちづくりのPRを兼ね、東京衛生病院が監修する産地直送荻窪ヘルシーフードの販売店舗を設置する。

タウンセブンの新たな姿

さらなる交流が生まれる
新しいタウンセブンが連絡通路としての機能を果たすことで、南北をまたぐ動線はタウンセブンに集中する。物理的な交流が生まれることで、よりいっそうのコミュニケーションが生まれる。

一つのまちとしてのタウンセブンへ
タウンセブンにも小さな『コト』が集積し、タウンセブン自体が複数の点を包含する一つのまち（タウン）として、新しくスタートする。

荻窪らしさが持続するまち

荻窪らしい空間を利用した「点」で起った『コト』は、南北に伸びる「線」としてタウンセブンに集中し、影響を与える。
タウンセブンは、その影響により『コト』を集約したまちとして、タウンセブン内で生まれた交流や『コト』を荻窪全体に広げる。
この相互関係により、持続性のある荻窪らしいまちを形成する。